

フランス語における語順構造シフトの通時的方向性

— 平叙文および疑問文のS/V語順構造の観点から見えてくるもの — *)

Sens diachronique du changement structural de l'ordre des mots en français

— Du point de vue de la structure totale de l'ordre de S/V

en phrase énonciative et en phrase interrogative —

今田良信

IMADA Yoshinobu

0. はじめに

本稿（ならびに今田(2012a)）は、これまで今田(2009), (2010a), (2010b), (2012b)において、古フランス語と現代フランス語の間に見られる「言語構造の変換」の事例として筆者が挙げたものの中で語順に関するもの、およびそれ以外に、語順類型論における主要語順パラメーターの構成要素どうしの相対的順序にも着目し、古フランス語から現代フランス語に至る語順構造シフトの通時的方向性とその方向性の背後で働いていると考えられるメカニズムを明らかにすることを目的としている。

この問題は、異なる角度から、大きく2つに分けて考えることができよう。

(I) 平叙文と疑問文それぞれの語順構造の変換を、一纏まりの有機的仕組みとして、同じ枠組みの中で考えた場合に、全体として、その仕組みがどのようにシフトしたのかという観点から捉えるものであり、具体的には、節内基本語順を構成するS〔主語〕とV〔動詞〕の語順構造シフトが問題となる。本稿では、こちらを主に扱う。

(II) 語順類型論において、節内基本語順を構成するVとO〔目的語〕の相対的順序を代表として、それ以外の主要語順パラメーターの構成要素どうし〔具体的には、名詞/形容詞(N/A), 名詞/関係節(N/Rel), 名詞/属格(N/G), 接置詞¹⁾/名詞(句)(Ap/N)〕の相対的順序も含め、²⁾ 1つの枠組みで考えた場合に、その語順構造全体がどのようにシフトしたのかという観点から捕らえる問題である。この相対的順序の2つの型を、W. P. Lehmannは「VO型」/「OV型」、³⁾ T. Vennemann, 他は「主要部-従属部(head-dependent)型」/「従属部-主要部(dependent-head)型」など⁴⁾と呼んでいる。こちらは、既に今田(2012a)で扱ったが、本稿でも次節でその要旨に触れる。

2つに分けて考えるのは、上述の「語順構造シフトの通時的方向性」と「その方向性の背後で働いていると考えられるメカニズム」の点で、これら2つの語順構造の動きが、異なる振る舞いをしていると考えられるからである。

1. 語順類型論的観点から見た語順構造シフトの通時的方向性とその方向性の背後に見られるメカニズム

前節(Ⅱ)で挙げた各主要語順パラメーターのパラメーター値を、〈従属部(D)－主要部(H) (=OV)型〉と〈主要部(H)－従属部(D) (=VO)型〉に分けて、略号で示すと〔表1〕の通りである〔なお、 \supset (あるいは \subset) は、数学の集合の記号で、全体集合Aと部分集合Bの関係を、 $A \supset B$ あるいは $B \subset A$ のように表わす。下線部筆者〕。

〔表1〕	〈D-H (=OV)型〉	〈H-D (=VO)型〉
(1) OV	(\supset <u>S</u> OV, <u>O</u> V <u>S</u> , <u>O</u> S <u>V</u>)	VO (\supset <u>S</u> VO, <u>V</u> SO, <u>V</u> OS)
(2) AN		NA
(3) RelN		NRel
(4) GN		NG
(5) NAp		ApN

〔今田(2012a)より〕

次に、古フランス語および現代フランス語における各主要語順パラメーター値の異同についてまとめたものが〔図1〕である〔 \Rightarrow は、新たな発展・変化を表わす〕。

〔図1〕	《古フランス語》	《現代フランス語》
V/Oの相対的順序	: H-D (=VO)型	\rightarrow H-D (=VO)型
N/Aの相対的順序	: D-H (=OV)型	\Rightarrow H-D (=VO)型
N/Relの相対的順序	: H-D (=VO)型	\rightarrow H-D (=VO)型
N/Gの相対的順序	: H-D (=VO)型	\rightarrow H-D (=VO)型
Ap/Nの相対的順序	: H-D (=VO)型	\rightarrow H-D (=VO)型

〔今田(2012a)より〕

古フランス語と現代フランス語とに形式的に大別して表にすれば、古フランス語の段階で既にN/Aを除いた他のすべてのパラメーター値がH-D (=VO)型ということになるが、もう少し細かく変化の時期の違いを吟味してみると、古フランス語期が始まるまでに既に大半のパラメーター (V/O, N/Rel, Ap/N) の値が揃って動きだしているH-D (=VO)型へと向かう方向性に合わせるかのように、他のパラメーター (N/G, N/A) の値も、時期の早い遅いの差はありながら、推移している実態が浮かび上がって

来る。⁵⁾ 例えば、V/Oの相対的順序については、ラテン語ではSOV語順でD-H (=OV) 型であったものが、古フランス語では既にSVO語順のH-D (=VO) 型となっている。また、N/Gの相対的順序については、古フランス語期の最古フランス語の時期(9世紀)にはまだGN語順でD-H (=OV) 型であったものが、その後、古フランス語期の13世紀前半までの間にNG語順のH-D (=VO) 型に定着している。⁶⁾ そして、N/Aの相対的順序については、古フランス語ではAN語順でD-H (=OV) 型であったものが、主要語順パラメーターの中では最も遅れて、現代フランス語でNA語順のH-D (=VO) 型となっている。その結果、現代フランス語では、最終的に、すべての主要語順パラメーターにおいて、H-D (=VO) 型の値が取られることになった。以上が、語順類型論的観点から捉えた、古フランス語から現代フランス語へ至る語順構造シフトの通時的方向性である。この方向性の背後には、全体として、各パラメーターをH-D (=VO) 型へ揃えようとするメカニズムが働いているように見える。これは、所謂「定向変化(drift)」⁷⁾ と呼ばれる現象の一種とすることができよう。

2. 通時的観点から見た平叙文と疑問文

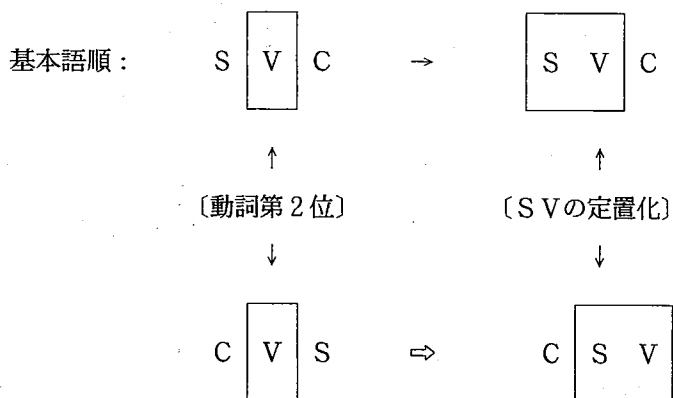
次に、(I)の観点、すなわち、平叙文および疑問文のS/V語順構造の観点から見た、語順構造シフト全体の動きの通時的方向性とその方向性の背後にあるメカニズムについて考えてみたい。そこで先ず、これまで一連の拙論で明らかにしてきた平叙文と疑問文それぞれの語順構造の変換について確認しておくことにしたい。

2. 1. 平叙文の語順構造の変換

次頁〔図2〕をご覧ください。平叙文の語順のうち、基本語順については古フランス語も現代フランス語もSVCである〔略号のCは、補語を示し、直接目的～、間接目的～、状況～を含む。従って、目的語を示すOよりも広い範囲のものを指していることに注意〕。しかし、もう少し細かく見てみると、今田(2002c)、他⁸⁾において既に述べてきたように、両体系における基本語順の価値は、それを取り巻く平叙文の語順全体の状況変化に伴って大きく異なっていることが分かる。すなわち、古フランス語は、「動詞第2位」が原則の語順体系であったのに対し、現代フランス語は、動詞活用語尾の実質的磨滅に代わって接頭辞的機能を担うに至った人称代名詞主語 (cf. Vidos(1959), p. 396) も含めて、SVが定置化された語順体系であるという点である。この両語順体系の根本的相違により、SVCという基本語順の価値も必然的に異なることになるので、これも平叙文の語順構造の枠組みの組み換えと考えられよう。この構造の変換を図式化したものが〔図2〕である。なお、図に示されている古フランス語と現代フランス語の各語順に対応する具体的事例を

表の後に挙げて置いた。⁹⁾

〔図2〕 《古フランス語》 《現代フランス語》



〔今田(2012b)より〕

e. g. 古フランス語 SVC: Il viendra peut-être.
 CVS: Peut-être viendra il.¹⁰⁾

現代フランス語 SVC: Il viendra peut-être.
 CSV: Peut-être il viendra.

2. 2. 疑問文の語順構造の変換

〔表2〕は、今田(2010b), p.27 に掲載した、「タイプごとに見た古フランス語と現代フランス語の疑問文」の表における各タイプに、略号化したS, VおよびK〔疑問詞〕による語順を付け加えたものである。なお、表に示されている全体疑問文および部分疑問文の各タイプに対応する具体的事例を文要素の略号と共に表の後に挙げて置いた。

この表を分析すれば、次の点が指摘できよう。

(i) 主語と動詞による語順の違いの面からの分析

通時的に見ると、全体疑問文と部分疑問文の両方において、VSが原則であったと考えられる古フランス語に比べて、現代フランス語は、SVを定置化したまま(=倒置せずに)疑問文を作るという傾向を新たに強くしていることが見て取れる。この点は、平叙文において観察される、「動詞第2位」が原則である古フランス語の語順体系からSVが定置化されるのが原則となった現代フランス語の語順体系へという、両語順体系間の根本的枠組みの変換の方向性とも矛盾無く合致していると言える。

〔表2〕タイプ別に見た古フランス語と現代フランス語の疑問文

	《古フランス語》	《現代フランス語》	語 順	
全 体 疑問文	①平叙疑問タイプ	不使用? →使用 (口語)	SV	
	②Est-ce queタイプ	不使用 →使用 (口語)	SV	
	③倒置疑問タイプ	使用 (原則) 〔名詞主語・代名詞主語 ともに単純倒置のみ〕	→使用 (書きことば中心) 〔代名詞主語は単純倒置, 名詞主語は複合倒置〕	VS
部 分 疑問文	①平叙疑問タイプ	不使用 →使用 (くだけた口語)	SVK	
	②強調疑問タイプ	使用 (まれ) →使用 (口語)	KSV	
	③倒置疑問タイプ	使用 (原則) 〔名詞主語・代名詞主語 ともに単純倒置のみ〕	→使用 (書きことば中心). 〔代名詞主語は単純倒置, 名詞主語は複合倒置およ び単純倒置もあり〕	KVS
	④間接疑問タイプ	不使用 (基本的に) →使用 (くだけた口語)	KSV	

〔今田(2010b)より〕

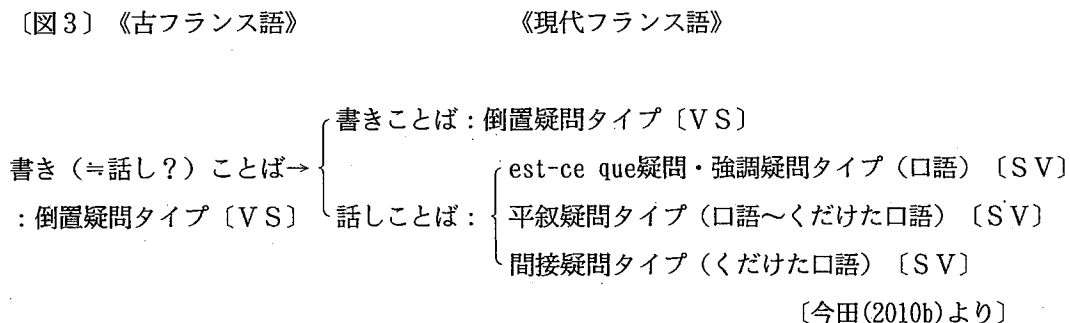
- e.g. 全体疑問文: ① Vous parlez français? [SV]
 ② Est-ce que vous parlez français? [SV]
 ③ Parlez-vous français? [VS]
- 部分疑問文: ① Ton cousin habite où? [SVK]
 ② Où est-ce que ton cousin habite? [KSV]
 ③ Où habite ton cousin? [KVS]
 ④ Où ton cousin habite? [KSV]

(ii) 文体や言語使用レベルの違いの面からの分析

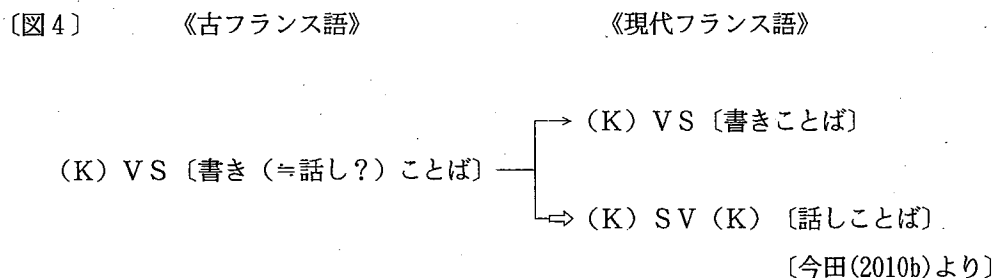
古フランス語においては、文法書等の記述の範囲で見ると、倒置疑問タイプが原則で、それ以外のタイプはほとんど未発達であり、結果として、話しことばと書きことばの両者が形式的に未分化であるように見える。一方、現代フランス語に至るまでに、倒置疑問タイプの他に3つの新しいタイプが発達してきたが、そのことが、話しことばと書きことば

の間に形式的な分化の傾向を生み出し、書きことばは倒置疑問 (= V S 語順) タイプ、話しことばはそれ以外の (= S V 語順) タイプ (すなわち, est-ce que 疑問・強調疑問タイプ, 平叙疑問タイプ, 間接疑問タイプ) というように、タイプによる役割分担が生じてきているという状況が見られる。

以上をまとめて図示すれば、〔図3〕の通りである。













さらに、最終的に、(i) と (ii) を統合して、全体疑問も部分疑問も区別せず、S と V の語順、疑問詞 (K) の位置、話しことばと書きことばの区別のみを単純化して、フランス語における疑問文の構造の変換を図式化すれば、〔図4〕のように図示できよう〔なお、() は、疑問詞について、有無 (=部分疑問か全体疑問か) の選択、および二者間 (= (K) S V (K) の2つのK) の択一 (文頭に来るか文末に来るか) を示す〕。

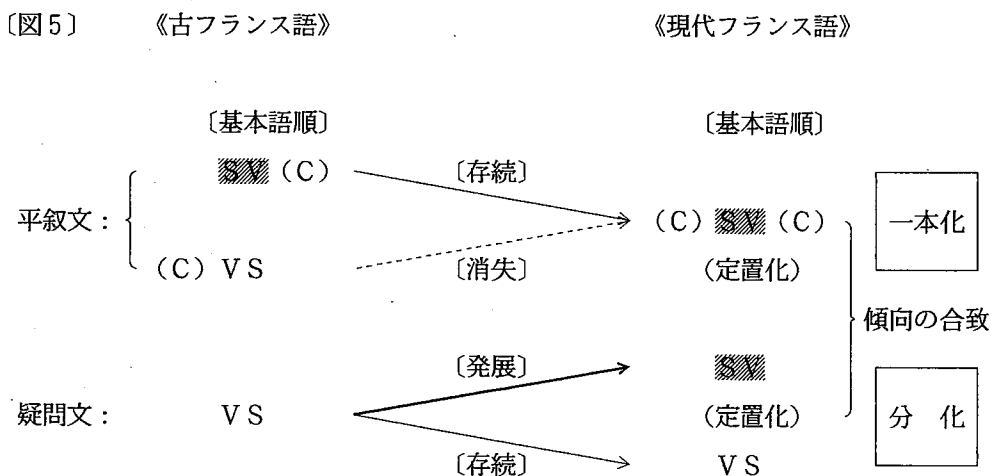


この図により指摘したい最も重要な点を端的に言うならば、古フランス語と現代フランス語の間に生じた疑問文の構造上の変換とは、全体疑問にせよ部分疑問にせよ、語順についてはVSからVS・SVへの分化が起こり、また文体・言語使用レベルについては書きことばと話しことばの形式的分化が起こって、この2つの分化が重なって一体化したということである。

3. 平叙文および疑問文のS/V語順構造の観点から見た語順構造シフトの通時的方向性とその方向性の背後に見られるメカニズム

〔図2〕でも指摘したように、平叙文については、古フランス語と現代フランス語で基本語順はSVCで変わっていないものの、古フランス語は平叙文全体としてSVCだけでなくCVSも同じくらいの頻度で用いられるという「動詞第2位」の語順体系であったものが、現代フランス語はSVC、CSVというSVが定置化されるのが原則の語順体系へと変換を遂げている。つまり、〔以下、SVにのみ網掛けを施す〕に焦点を当てると、C・CVSからC・Cへということ、SとVの関係だけで考えれば、・VSからに一本化（収斂）されたことになる。

一方、疑問文については、古フランス語では平叙文の（基本語順：C）に対し、VS（書きことば⇨話しことば？）が疑問文のマーカースとして機能上の対照をなしていたが、平叙文のCVS語順に対してはそうではなかった。従って、この部分は古フランス語の語順体系において不安定要因になったとも考えられ、それが語順構造の変換を引き起こす一因となった可能性がある。そしてその結果として、平叙文から（C）VSが消失していく動きに合わせるかのようにして、疑問文においては、語順についてはVSからVS・への分化が、また文体・言語使用レベルについては書きことばと話しことばの形式的分化が起り、この2つの分化が重なり一体化して、現代フランス語ではVSは書きことばを、は話しことばを機能上分担するようになったと考えられる。これを図示したのが〔図5〕である。



この図に基づいて、平叙文と疑問文を含めた語順構造全体の動きを通時的観点から眺め

ると、部分的には語順項目（ VS ）の消失や発展や存続が見られるものの、全体的には項目数は変わらず、分布的には VS 優勢から $VS \cdot V$ 優勢へ緩やかにシフトしていることが分かる。その主な原因は、古フランス語では平叙文にも多く分布していた $VS (= (C) VS$ 語順)が、現代フランス語では殆ど姿を消し、逆に疑問文では姿がほぼ確認されていなかった VS が新たな構文タイプの出現と共に、特に話しことばで分布を増やしたからであると考えられる。これが、 S/V による語順構造シフトの通時的方向性である。

そして、 S/V による語順構造シフトの通時的方向性の場合、1. で扱った一定の方向へ向かおうとする語順類型論的観点から見た語順構造シフトの場合とは異なり、その背後には、緩やかに VS 優勢から $VS \cdot V$ 優勢へとシフトしてはいるが、全体として、平叙文では $VS \cdot V$ から VS への語順項目の一本化によって、また疑問文では VS から $VS \cdot V$ への語順項目の分化によって、 VS と $VS \cdot V$ 両者間のバランスを取ろうとするようなメカニズムが働いていたと見ることもできよう。少なくとも、一本化と分化が同時並行的に起こっていたということである。¹¹⁾

注

- *) 本稿は、日本ロマンス語学会第50回大会（上智大学，2012年5月20日）における口頭発表をもとに、修正・加筆を施したものである。
- 1) 接置詞(adposition)とは、前置詞(preposition)と後置詞(postposition)を包括する用語である(Comrie(1989²), p.91 参照)。
 - 2) この各主要語順パラメーターに関しては、Comrie(1989²), p.98 を参考にした。
 - 3) Comrie(1989²), p.96 参照。
 - 4) Comrie(1989²), p.96 によれば、他にも、operand/operator, head/adjunct, head/modifierという対用語が挙がっており、Vennemann はoperand/operator「被操作子—操作子」を用いているが、本稿では、この対用語を用いることにしたい。
 - 5) 詳しくは、今田(2012a), pp.120-123参照。
 - 6) 具体的事例など、詳しくは、今田(2013a), p.37, 注2), 3)参照。
 - 7) Edward Sapirの用語。フランス語では、単にtendance「傾向」と訳されている。『現代言語学辞典』, p.178 によれば、「言語を均衡のとれた形式へ向かわせる原動力。〔中略〕言語のもつ強力な生命が、言語を一定の類型(type)へ駆り立てるという意味で、泉井久之助は「駆流」と訳した…」とある。また、Dubois et al.(1973), p.484 には、「言語の変異において、おそらく解明困難と思われる理由によって、諸変化が共通の方向をもつようであり、明確には表明できないものだが、ある一般法則に規制

されているようだということが時々みられる。その場合に〈言語の傾向〉という言い方がされる。」と述べられている。この現象については, Sapir(1982), pp.147-170 参照。また, 今田(2013a), pp.32-34 の説明も参照されたい。

- 8) 今田(1993), (1995), (1996), Imada(1997), 今田(1998)という一連の論考を参照のこと。
- 9) 各例文の概念的意味は「彼は来るかも知れない」で同様。なお, 現代フランス語でも, C V S 語順の *Peut-être viendra-t-il.* は全く不使用ではないが, Roberge, 他(2002), p.880 によれば, 「これは凝った文体であって, ごく稀にしか用いられない」と指摘されており, やはり原則は C S V 語順である。しかも, 現代フランス語の話しことばでは, *Peut-être qu'il viendra.* のように, わざわざ *que* を挿入してまで S V を保持しようとする傾向さえも見られる。
- 10) 現代フランス語と異なり, 語調の *t* は挿入されない。
- 11) この点については, Frei(1929), p.41 を参照のこと。言語的「欲求」というものによってこのような現象の根源を的確に説明している。また, 今田(2013a), pp.31-32 の説明も参照されたい。

参考文献

- 安藤貞雄(1987):『英語の論理・日本語の論理 — 対照言語学的研究 —』, 大修館書店。
- 今田良信(1993):「古フランス語における文頭の補語要素と語順 — C V S 語順対 C S V 語順を基準として —」, 『ニダバ』, 22, pp.80-91.
- 今田良信(1995):「古フランス語における文頭に従属節を有する複文の語順について」, 『吉川守先生御退官記念言語学論文集』, 溪水社, pp.31-45.
- 今田良信(1996):「古フランス語における文頭の補語と語順」, 『ロマンス語研究』; 29, pp.68-82.
- 今田良信(1998):「古フランス語における文の肯定/否定と語順 — 文頭に現れる若干の状況補語(句)と C V S / C S V 語順との関係について —」, 『新村猛先生追悼論文集』, フランス図書, pp.205-210.
- 今田良信(2002c):『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 —』, 溪水社。
- 今田良信(2009):「フランス語歴史言語類型論の試み」, 『ニダバ』, 38, pp.1-10.
- 今田良信(2010a):「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から —」, 『ニダバ』, 39, pp.31-40.

- 今田良信(2010b):「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」, 『ロマンス語研究』, 43, pp.21-30.
- 今田良信(2011):「日本語・フランス語の諸相対照研究 — フランス語の特色を中心として —」, 『ニダバ』, 40, pp.10-19.
- 今田良信(2012a):「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 語順類型論的観点から見えてくるもの —」, 『ニダバ』, 41, pp.117-126.
- 今田良信(2012b):「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」, 『ロマンス語研究』, 45, 10p. (印刷中)
- 今田良信(2013a):「フランス語語順構造シフトの過程における一般言語学的言語作用」, 『ニダバ』, 42, pp.30-31.
- 古浦敏生(2008):『日本語・イタリア語対照研究』, 文流.
- Roberge, Claude, Solange内藤, Fabienne Guillemin, 加藤雅郁, 小林正巳, 中村典子 (2002):『21世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356項目 —』, 駿河台出版社.
- Comrie, B. (1989²): *Language Universals and Linguistic Typology*, Oxford: Blackwell.
(松本克己・山本秀樹訳(1992):『言語普遍性と言語類型論』, ひつじ書房)
- Dubois J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Paris: Larousse.
(福井芳男, 他編訳(1980):『ラールス言語学用語辞典』, 大修館書店)
- Frei, H. (1929): *La grammaire des fautes: Introduction à la linguistique fonctionnelle*, Paris: Geuthner.
- Greenberg, J. H. (1966c²): *Universals of Language*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Imada Y. (1997): La distinction affirmation/négation dans la phrase et l'ordre des mots en ancien français — Sur le rapport entre certains compléments circonstanciels en tête de phrase et l'ordre CVS/CSV —, *Studia Romanica*, 30, pp.9-16.
- Lehmann, W. P. (1974): *Proto-Indo-European Syntax*, Austin.
- Sapir, E. (1982): *Language: An Introduction to the Study of Speech*, London: Granada.
- Vennemann, Theo. (1972): Analogy in Generative Grammar, the origin of Word Order.
In Heilmann, Luigi, editor, *Proceedings of the Eleventh International Congress of Linguists*, 2 volumes (Bologna: Il Mulino), 2, pp.79-83.
- Vidos, B. E. (1959): *Manuale di linguistica romanza*, Firenze, Leo S. Olschki.